



瀬田の丘裏庭版

主任司祭から瀬田の兄弟姉妹へ

主任司祭 小西広志 神父



創刊 2022 年

編集協力・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部 東京都世田谷区瀬田 4-16-1

四旬節をこんなふうにご過ごしてみたら



今年(今年は)は三月二日が灰の水曜日です。そしてイースターは四月十七日となります。この期間を四旬節といいますが、イエスさまの十字架を黙想し、祈りと節制に努める季節です。

今年の四旬節はどのように過ごしましょうか？ 小さな犠牲をさげることがもちろん勧められますし、普段の生活を少し変えて節制に努めることも勧められます。また、カリタス・ジャパンの要請に応じて節制の実りを四旬節の愛の献金にすることも大切です。

しかし、特に今年は特別な四旬節を迎えたようにも思うのです。先月の末から始まったロシアによるウクライナ侵略、あるいはウクライナ侵略のことに無関心ではられません。そこで、ウクライナとロシアの人々のことを想いな

がら、四旬節を過ごしてまいりましょう。

具体的な勧めをいたします。

①正しい、正しくないの判断はしない。

今回の出来事は誰が正義で、誰が不正義なのかハッキリとしません。もちろん、突然にウクライナに侵攻したロシアがおこなったことは間違いですし、あつてはならないことです。しかし、二国間の対立を簡単に判断できない複雑な要素が絡み合っています。わた

したちが願うのは「平和」です。「争い」ではありません。一方の当事者だけを責めてみたところで、新たな「争い」の火種となりかねません。

②人々の哀しみと苦しみ心へを寄せ。

ウクライナは国家総動員を宣言しました。これは国民の一人ひとりが武器を持つて戦うことを意味します。つまり、市民を巻き込んだ戦いが始まったのです。西側諸国はウクライナに武器を供与し始めたと言いました。これから先、



「死んだ男の残したものは」

谷川俊太郎作詞 武満徹作曲

- 1 死んだ男の残したものは
ひとりの妻とひとりの子ども
他には何も残さなかった
墓石ひとつ残さなかった
- 2 死んだ女の残したものは
しおれた花とひとりの子ども
他には何も残さなかった
着もの一枚残さなかった
- 3 死んだ子どもの残したものは
ねじれた脚と乾いた涙
他には何も残さなかった
思い出ひとつ残さなかった
- 4 死んだ兵士の残したものは
こわれた銃とゆがんだ地球
他には何も残せなかった
平和ひとつ残せなかった
- 5 死んだかれらの残したものは
生きてるわたし生きてるあなた
他には誰も残っていない
他には誰も残っていない
- 6 死んだ歴史の残したものは
輝く今日とまた来るあした
他には何も残っていない
他には何も残っていない

小林沙羅さんの歌唱が聴けます。



多くの人々が戦いの中で哀しみと苦しみを体験します。ロシアの下級兵士たちは、訓練だと思いこんで出動したというニュースも聞きました。彼らは戦いを望んではいないのです。ロシア国内で反戦運動が繰り広げられているそうです。ロシアの人々も哀しみと苦しみにあります。そんな人々のために祈りをささげましょう。

③メディアに頼ってはならない。

テレビ、新聞、SNS、YouTubeなどは毎日、情報を伝えてきます。しかし、その情報に翻弄され

ないようにしましょう。煽動的なものばかりです。この二年間、わたしたちはメディアの流す情報に翻弄され続けました。ニュースや画像、動画を見ても、冷静でいられるように祈ってください。こういった冷静さは祈りによらなければ身につけません。そして、たくさんさんの情報の中にある真実を見通す眼を願い求めましょう。

④毎日、一つのことだけを祈りましょう。

それでも、わたしたちはウクライナ情勢についての様々な情報を

耳にしたり、目にしたりします。その時は、一つのことだけを取りあげて祈ってください。例えば避難する子どもの姿から、その子のために祈ってください。地下シェルターで肩を寄せる家族のために祈ってください。祈りの中で正義を振り回すのはやめましょう。ただ、「イエスさま、この人たちを救ってください」と祈りましょう。

⑤宗教戦争だと語る人たちの意見に耳を傾けるのはやめましょう。

日本の識者、知識人は今回の出来事の背景に宗教的な対立があ

ると誤知り顔で解説するでしょう。それはあまり正しい見方ではないです。もともとウクライナの宗教は多様です。ウクライナ正教会、ロシア正教会、ウクライナ・ギリシア・カトリック教会、ローマ・カトリック教会、イスラム教、ユダヤ教などの信仰があります。人々はお互いの信仰を尊重しあって生きてきました。むしろ、この機会に知っていただきたいのは、ウクライナという土地が大国の利己主義に翻弄されたという事実です。ロシア革命後のソヴィエトはウクライナでいち早く農奴解放政

策を実行し、たくさんの人々が虐殺されました。ナチスが侵略してたくさんユダヤ人たちが殺されました。そして、独ソ戦という悲惨な戦争がありました。この二十年、クリミア半島をめぐるロシアとの確執が生じました。まさにウクライナは「ブラッドランド」（血の土地）だったのです。それでも、人々は共に交わりを大切に生きてきたのです。

⑥日本の右派勢力には気をつけましょう。

この機に乗じて、我が国の政権与党の右寄りの人々は核武装などを主張しかねないです。彼らの言動には十分注意しましょう。

ウクライナとロシアの人々の哀しみと苦しみに触れながら、イエスさまの十字架の哀しみと苦しみを黙想する四旬節が過ぎますように。



四旬節第一主日から第五主日までの 朗読箇所とその要点 (C年)

エッセンス

第一主日 (三月六日)

神へと目を向ける (回心)

第一朗読 申命記 26章 4 - 10節

「乳と蜜の流れる土地」へと導いてくださる神への感謝。

第二朗読 ローマの信徒への手紙 10章 8 - 13節

「イエスは主である」と言い表せるためには神の言葉への信頼が必要。

福音朗読 ルカ福音書 4章 1 - 13節

「主に仕える」生き方は誘惑を試練へと変える。



第二主日 (三月十三日)

私たちの未来の姿

第一朗読 創世記 15章 5 - 12、17 - 18節

「あなたにこの土地を与える」と言ってアブラハムと約束する

(契約を結ぶ) 神。

第二朗読 フイリピの信徒への手紙 3章 20節 - 4章 1節

キリストは「私たちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」そこに私たちの未来の姿がある。

福音朗読 ルカ福音書 9章 28b - 36節

節

「これはわたしの子……これに聞け」イエスの声に耳を傾け、従って、私たちは栄光に輝くイエスと同じ姿に変えられていく。

第三主日 (三月二十日)

共にいる神は、人間の悔い改めを辛抱強く待つ神

第一朗読 出エジプト記 3章 1 - 8a、13 - 15節

「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われる神は、いつでも、どこでも民と共にいる。

第二朗読 コリントの信徒への手紙 10章 1 - 6、10 - 12節

出エジプトの民はキリスト者の前表だった。



福音朗読 ルカ福音書13章1-9
節

自分の罪深さに気づく。神は悔い改めを待っている。

...

第四主日 (三月二十七日)

父は生かす神

第一朗読 ヨシユア記5章9a、10-12節

「過越祭を祝った」民はいのちをくださる神との関わり合いのなかで、神と共に生きていく。

第二朗読 コリントの信徒への手紙二5章17-21節

「キリストと結ばれる人」は新しく創造された人。人に新しいのちを与えるためにキリストは十字架にかけられた。

福音朗読 ルカ福音書15章1-3、11-32節

「この子は死んでいたのに生き返り」と父は私たちが生きるのを喜ぶ。

...

第五主日 (四月三日)

新たにされ、歩み出す人間

第一朗読 イザヤ書43章16-21節

「新しいことをわたしは行う」なぜなら神は御自分のために創られたから。

第二朗読 フィリピの信徒への手紙3章8-14節

「キリスト・イエスに捕らえられている」パウロは、信仰の恵みを受けて歩み続ける。

福音朗読 ヨハネ福音書8章1-11節

「わたしもあなたを罪に定めない」とイエスはゆるしを与える。こうして人は新たに歩き出す。

聖週間と

主の過越の聖なる三日間

神の国の訪れを、ことごと行動をもって現されたイエス・キリス

トは、受難と死を通して復活の栄光に移られました。これを「主の過越」と言います。そして、旧約の「過越祭」に代わって、新約の民キリスト者にとっては、「主の過越」を記念する祭りが年に一度、最も盛大に祝われる祭りになりました。これが復活祭（主の復活の主日）です。この祭りは本来、受難・死・復活という主の過越の出来事全体を記念するものです。当初は、復活の主日とその前日の典礼で行われていたようですが、やがて四世紀の後半からは、できるだけ出来事の経過に忠実に祝おうということから、まず「主の過越の聖なる三日間」が重要なものになり、やがて復活の主日の前の主日（受難の主日）からの一週間全体が「聖週間」として大切にされるようになりました。

聖週間の典礼は、四世紀末のエルサレムで特に盛大に行われていました。当時、聖地エルサレムへ巡礼したことのあるエテリア（スペインの一女性）の巡礼記による

と、エルサレムに住むキリスト者は、既に復活祭の一週間前に、枝の主日の起源となった「主のエルサレム入城」の出来事（マタイ21・1-11）を追憶する祭儀を行っていたことが分かります。この枝の主日から始まる一連の記念祭儀の中心になっていたのは、イエスが最後の晩餐を行い、苦しみを受け、死んで、復活された経緯に従って、該当する曜日に同じ場所に赴き、その時の出来事を記した聖書の箇所を朗読しながら、主



が死から復活の命に過ぎ越されたことを、三日間かけて祝うことでした。エルサレムで行われていたこのような一連の記念祭儀がモデルとなって、次第に、各地の教会にも、聖週間の典礼が広まっています。こうして復活祭に先立つ一週間が「聖週間」と呼ばれ、その中でも、「主の晩餐の夕べのミサ」から、「主の受難」の祭儀を経て、「復活徹夜祭」を頂点とし、「復活の主日」に至る三日間が、「主の過越の聖なる三日間」と呼ばれるようになりました。

この新しい過越が、ユダヤ人の過越祭（安息日で土曜日）を包み込むかのような日取りで行われたことは、ユダヤ人の過越祭の小羊に代わって、イエスさまが「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ1・29）となり、私たちのために復活の命をもたらしてくださったことを暗示しているかのようです。

ところで、「聖なる三日間」とは、「三日目に復活」（使徒信条）と

いわれるときと同じように、実は、日没が一日の境目であるという当時のユダヤ暦の考えがもとになって、次のような数え方をします。

・第一日（ユダヤ暦の週の第六日）
木曜日の日没から金曜日の日没まで。すなわち、最後の晩餐からイエスの死、そして墓に葬られるまで。典礼上は、聖木曜日「主の晩さんの夕べのミサ」から、正式には午後三時ころ行われる聖金曜日「主の受難」の祭儀まで。

・第二日（ユダヤ暦の安息日）
金曜日の日没から土曜日の日没まで。主の墓にとどまって、主の受難と死を思うという意味で、祭壇の飾りを取り除き、ミサもさげません。

・第三日（ユダヤ暦の週の初めの日）
土曜日の日没から日曜日の日没まで。教会はこの夜を復活徹夜祭で盛大に祝い、翌朝、復活の主日のミサを行い、そして復活の主日の晩の祈りで締めくくります。

新しいミサの式次第について

今年の十一月二十七日よりミサの式次第が変わります。式文がずいぶんと変更になります。わたし

解説したいと思います。

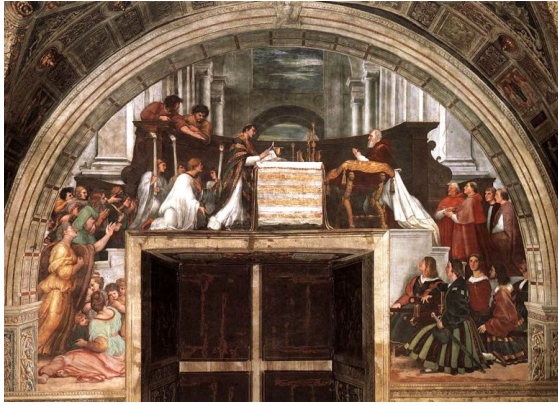
まず、あわれみの賛歌が、いくしみの賛歌に変わる点が少し違和感を覚えるかもしれません。

想像しています。すでに、変更箇所の一覧などが発表されていますから、皆さんもご覧になつていただいましょう。

変更箇所の意味などを少しずつ

先唱者…主よ、いくしみをわたしに。
先唱者…キリスト、いくしみをわたしに。
会衆…キリスト、いくしみをわたしに。





先唱者・主よ、いつくしみを。
会衆・主よ、いつくしみをわたし
たちに。

このように「主よ、いつくしみを」の先唱に対して会衆は「主よ、いつくしみをわたしに」と応えるようになります。つまり「あわれみ」から「いつくしみ」へと変わるわけです。この点について、すでに批判をなさっている方々もいらつしやるようですが、その批判は、あまり意味がないようにわたしには思えるのです。「あわれ

み」がよいか、「いつくしみ」がよいかは語句の問題であって、それはその人の感受性と関係します。ですから、議論してもし尽くせません。ましてや、だったらラテン語のミサの方がよいというのもおかしな話で、ラテン語がお分かりになるの？と問いかけたいです。一応、今回の改訂ではギリシア語原文の「キリエ・エレイソン」を唱えてもよいことになっていま

す。
むしろ、わたしはこう考えたいです。つまり、今回の式文の改訂で「あわれみ」から、「いつくしみ」という表現に変わったおかげで、わたしたちはさらに神さまの愛の豊かさに触れることができるのです。
ミサの式文はただ唱えるのではなく、できれば一語一語かみしめて、味わって唱えたいものです。司祭も、ただ式文を読むのではなく、こころに響く式文の一節を大切にしながらミサをささげるので

ミサの式文がすべて分かる人はいません。ミサに繰り返しあずかることで、司祭であればミサを繰り返しささげること、少しづつ式文の持つ深い意味に気づいていくのです。

あるとき、先輩の神父さんと電車に乗っていて、その方が「主イエス・キリストのめぐみ、神の愛、聖霊の交わりが皆さんと共に」という言葉はすごいよねと突然、話しかけてきました。わたしはビックリしましたが、何か神さまの恵みの働きでその神父さんは、ミサの式文のその箇所に驚かれたのだと思います。このような体験は司祭ばかりではなく、修道者も信徒もできるはずで

す。
ほんとうに、ミサというのは不思議なもので、いつも通りのミサの中にあっても、ある日突然、頭ではいまひとつ理解できていなかったことを心で感じる瞬間に会います。人によって感じ方は様々でしょうが、なにかしら、言葉で

はなく「はっ」とした瞬間を感じられた方は少なからずいると思います。自分でも説明できないことばの意味を、神さまは直接心に届けてくれるのだと思います。新しい式文にも同じような気づきが隠れているかも知れません。

わたしは、これまで、「あわれみ」と表現していた神さまの愛への願いを、「いつくしみ」と言い換えることで、さらに豊かに神さまの愛を感じる機会となるのだと確信しています。そして、「いつくしみをわたしに」と会衆の皆さんと共に唱えることで、わたしたちが神さまからの愛の恵みを願う神の民の一員にあらためてさせていただくことが実感できると思うのです。今回のミサの式文の変更



絵画に寄せて

大工の聖ヨセフ

ジョルジュ・ド・ラ・トゥール
ル（一五九三年三月十九日－
一六五二年一月三十日）

ラ・トゥールは日本でも人気のある作家です。作品全体は二つの種類に分けられます。一つは「いかさま師」などに代表される一連の風俗画と、もう一つは聖書に題材をおいた宗教画です。

宗教画では、画面の大部分を闇が支配しており、その中に光に照らし出される聖書の登場人物たちが描かれています。ですから、明暗がハッキリした作風となっています。しかし、光そのものは描かれていません。

ラ・トゥールは弟子たちを抱え、工房も持っていました。フランスの国王ルイ十三世の国王付画家の

称号を得るほどまでに当時は名声を博した画家でした。一六五二年にベストで死去しています。ラ・トゥールは歴史の中に埋もれ、忘れ去られていました。二十世紀初頭に再発見、再評価された作家です。

本作、「大工の聖ヨセフ」をみると、画面の右側に少年が座っています。ロウソクのようなものを持っており、その光に少年の顔は照らされます。

少年と向き合う壮年の男性が聖ヨセフです。大工の聖ヨセフは、将来、この少年が架けられるであろう十字架を想わせる

木材に穴をあけています。少年の平和で幸せそうな表情とは対照的に、聖ヨセフは上目づかいで少年を見つめながら、愁いに満ちた表情です。二人の視線は決して交わることはありません。

この作品には真作と模作の二つがあります。模作はラ・トゥール

工房で弟子たちによって作られたと考えられています。真作はパリのルーヴル美術館に、模作はフランスのブザンソン市立美術館に所蔵されています。しかし、両者の違いはほとんどありません。模作は一九五四年と二〇〇五年に、真作は一九六六年に東京で公開されています。



「大工の聖ヨセフ」

ジョルジュ・ド・ラ・トゥール（1645年）ルーヴル美術館所蔵

主任司祭からのお知らせ

コロナ禍^かにかかわらず、皆さまがよく教会^{つど}に集^{かんしゃ}ってくださることに感謝いたします。感染予防に気をつけてミサにあずかりましょう。

フードパントリーへのご協力、ありがとうございました。

2月の主日に、二度にわたって瀬田二丁目のフードパントリーのために支援^{しえん}の物品販売を行いました。おかげさまで5万6000円ほどの収益がありました。おでかけひろば まーぶるにお渡^{わた}しました。

アントニオ会館の改修工事

アントニオ会館の改修工事^{じゆんび}の準備が進みつつあります。早ければ6月ぐらいに着工^{ちやっこう}できそうです。

身の回りのものにご注意

ミサに与^{さい}っている際などは身の回りのものにご注意ください。

アントニオ食堂

修道院では毎週木曜日にアントニオ食堂を実施しています。現在、50食のお弁当^{ていきょう}を提供しています。皆様のご協力をお願いします。

典礼の暦

- 3月 6日 四旬節第一主日 洗礼入門式、志願式
13日 四旬節第二主日
20日 四旬節第三主日
27日 四旬節第四主日
4月 3日 四旬節第五主日
10日 受難の主日
14日 聖木曜日 主の晩餐のミサ 午後7時半
15日 聖金曜日 主の受難 午後7時半
16日 復活徹夜祭 午後7時半
17日 復活の主日 午前7時、8時半、9時半
24日 復活節第二主日
5月 1日 復活節第三主日

